

修士論文（要旨）

2023 年 1 月

視聴覚メディアの聴解リソースとしての可能性
ー中国語母語話者初中級日本語学習者を対象としてー

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

220J3010

孫 萌悦

Master's Thesis(Abstract)

January 2023

The possibility of audio-visual media as a listening resource :
A study of the first intermediate Japanese learners of Chinese

SUN MENGYUE

220J3010

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

序章	1
第1章 研究目的と意義	2
1.1 研究目的	2
1.2 研究意義	2
第2章 「視聴覚メディア」の定義と先行研究	3
2.1 「視聴覚メディア」の定義	3
2.2 先行研究	3
2.3 先行研究の課題と問題点	6
第3章 映像と聴解の関係	7
3.1 映像作品の認知とメディアの効果	7
3.1.1 視覚と理解	7
3.1.2 映像とイメージ	7
3.2 映像と教育	8
3.2.1 認知的側面と情意的側面における視聴覚メディアの効果	8
3.2.2 非言語的メッセージと映像作品の教育特性	9
3.3 聴解とメディア	9
第4章 調査 A	11
4.1 聴解リソースとしての視聴覚メディアの活用状況に関する調査概要	11
4.2 調査 A の協力者	11
4.3 調査方法	13
4.4 調査結果と分析	14
4.4.1 アンケートから見た調査協力者の個人情報	14
4.4.2 調査協力者の聴解能力	19
4.4.3 視聴覚メディアの使用状況	21
第5章 調査 B	24
5.1 聴解リソースとしての視聴覚メディアの可能性に関する調査概要	24
5.2 インタビュー協力者	25
5.2.1 協力者 S1 の概要	25
5.2.2 協力者 S2 の概要	25
5.2.3 質的研究におけるサンプルの数について	26
5.3 調査方法	27
5.3.1 質的データ分析法の概要	27
5.3.2 質的データ分析法の手順	28
5.3.3 定性的コーディングと定量的コーディングの比較	29
5.3.4 事例ーコード・マトリックスによる分析	30
5.4 インタビューの結果と分析	30
5.4.1 視聴覚メディアの使用	31
5.4.2 学習者は聴解リソースとしての視聴覚メディアに対する態度	36
5.4.3 聴解リソースとしての視聴覚メディアの問題点	42
第6章 考察	44

第7章 まとめと今後の課題	45
7.1 研究結果	45
7.2 今後の課題.....	45
参考文献	
資料	

要旨

2018年度の国際交流基金の調査によると、中国における日本語教育機関数が2115機関に達し、2015年度より、15.1%増加したとのことである。そして、調査によると、中国日本語学習者の人数は100万人を越え、2015年度より51342人が増加し、世界第一位の日本語教育国となったことである。学習者ニーズの多様性と学習者数の激増が、現在中国における日本語教育の現状であると見られる。こうした現状の中、聴解の重要性は高まっている。

情報環境が整備され、情報ネットワークを活用したeラーニングは近年、第二言語教育需要の拡大に伴う日本語学習ニーズの多様化に応じるため、第二言語教育界の新しい可能性を開拓するものとして急に充実してきた。

近年、日本のドラマ、アニメ、映画などがマスメディアを通じて世界中に配信され、これが日本語学習者の学習の動機に繋がっていることから、文化や言語の真正性の高い学習リソースとして日本国内外の教育現場での活用が期待されている。

以上、筆者は音声情報と他の知識経験と結びつける視聴覚メディア教材を教室外の副教材として日本語の聴解授業に導入する可能性を深く考察する必要があると考える。

本研究では、中国語母語話者初中級日本語学習者を対象とし、視聴覚メディアの聴解の学習リソースとしての可能性について考察し、視聴覚メディアは聴解内容に対する理解にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とする。

研究目的と合わせ、以下のような三つのリサーチ・クエスチョンを設定した：

1. 中国語母語話者は聴解練習のため、視聴覚メディアを使用しているのか、現在使用状況の全体像はどうか。
2. 視聴覚メディアは学習者の聴解能力にどんな影響を与えているのか。
3. 学習者は視聴覚メディアを通じ、どのような学習ストラテジーを使用しているのか。

本研究の研究方法は調査Aのアンケート調査と調査Bの半構造化インタビュー調査である。

調査Aは中国語母語話者である日本語初中級学習者（中国在住で日本語を専攻とする大学生、日本在住の日本語学校の留学生、中国在住の日本語独学者）、計100名を選択し、アンケート調査を実施した。

アンケートから得られたデータは質問項目ごとの単純集計を行い、学習者の基本的個人情報を確認し、次に聴解リソースとしての視聴覚メディアの使用状況について、メディアの利用種類、利用手段、利用頻度、利用目的、利用内容と理由に関する質問の回答を具体的に分析し、さらに、上述の研究目的に合わせ、質問項目のクロス集計を行い、視聴覚メディアの現在利用状況と学習者間の普及率について全体像を把握し考察した。

調査Bは調査Aで過去にも視聴覚メディアを使用した経験のある学習者2名を対象に、視聴覚メディアの使用、聴解リソースとしての視聴覚メディアに対する学習者の態度、聴解リソースとしての視聴覚メディアの問題点について、半構造化インタビューを行った。インタビューの内容は録音し、文字化して分析データとした。分析は佐藤郁哉(2008)の「質的データ分析法」を参考に進めた。

調査の考察から、視聴覚メディアの使用が学習意欲に影響を与えると感じており、視聴覚メディアが協力者の聴解向上に概ね積極的な影響を与えるということが明らかになり、以下の結果が得られた：

①初中級日本語学習者が教室外で聴解活動を行う際に、視聴覚メディアを聴解リソースとしての使用頻度と使用時間数が非常に高い。様々なメディアの中でも、特に映像作品とインターネットの使用率が高い。

②初中級日本語学習者が視聴覚メディアの使用を通じ、聴解力が上昇することを大きく実感した。

③初中級日本語学習者が視聴覚メディアを活用し、様々な聴解ストラテジーを利用している。また、調査対象となった学習者が視聴覚メディアの聴解学習効果に期待はしてい、今後の視聴覚メディアを用いた授業は聴解力の向上に役に立つというビリーフを持っている。

今後の課題としては、本調査の結果を基に、学習者だけではなく、教師が学習者の視聴覚メディア使用の実態をどのように捉えているか、また、視聴覚メディアが聴解の副教材としても使用可能であるかという日本語教師の視点から、日本語教育現場における教室外での視聴覚メディア使用についての実態と、教師の観点と意識についても質的調査を行い、異なる視点でメディアの現状を把握する必要があると考えられる

参考文献

- 青木直子 (1998) 「学習者オートノミーと教師の役割」『分野別専門日本語教育研究会—自律学習をどう支援するか—報告書』国際交流基金関西国際センター、4 - 25.
- 岩下智彦・岩本尚希・三國喜保子・谷口美穂 (2012) 「マルチメディア日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーの特徴」『桜美林言語教育論叢』第8巻、桜美林大学大学院言語教育研究所、125 - 141.
- 岩下智彦・三國喜保子・岩間徳兼 (2018) 「映像コンテンツを利用した教室外日本語学習—タイ人大学生の言語学習ストラテジーの分析から—」『社会言語科学』第21巻、第1号、303-316.
- 尹松 (2000) 「聴解における先行オーガナイザーの効果について—日本語を主専攻とする中国の大学生の胎」『人間文化論叢』2、33-42、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科.
- 河内山晶子 (1999) 「聴解ストラテジーの意識的使用による効果—学力差要因と、L1-L2 転移 要因を中心に—」『横浜国立大学留学生センター紀要』27-37 横浜国立大学留学生センター
- 加藤伸彦 (2020) 「オンライン授業における聴解活動の一試案—日本語中級レベルにおける YouTube ANNewsCH を用いた実践—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol. 24、No. 1、136-137.
- 神夏磯 晴香・泉 祐花・大久保 亜紀 (2018) 『日本語教育方法研究会誌』 Vol. 25 No. 1、25 巻1号、64-65.
- 神夏磯 晴香・大久保亜紀・重信楓 (2017) 「日本語初級学習者におけるアニメを使用した文法導入の効果—アニメ『千と千尋の神隠し』を使用して—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol. 24 No. 1、72-73.
- 清水美帆・岩下智彦・篠崎佳恵・高橋敦・臼井直也 (2014) 「映画を用いた授業における協働的学び：—学習者同士のインターアクションの分析から—」『言語教育研究』第5号 (2014年度)、25-39.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新 曜社.
- 佐野 洋・藤村知子・林 俊成・芝野耕司 (2004) 「多言語対応・初級日本語 e-Learning 教材の開発」『コンピュータ&エデュケーション』第17巻、119-125.
- 徐燕 (2016) 「中国の大学における日本語教育の現状と課題—日本語学習者、教育実践者、研究者としての視点から—」『専門日本語教育研究』第18巻、3-8.
- 菅原 良・村木英治 (2007) 「日本における eラーニングの発展に関する時系列的再整理—eラーニングの発展過程、定義、分類に注目して—」『コンピュータ&エデュケーション 特集 eラーニングは未来を拓けるか』第23巻、17-22.
- 鈴木慶太・永瀬宏・平山亮・郭清蓮・黒田尚宏・島崎猛夫・堀有行 (2011) 「ビデオ映像を使った医学生向け体験型学習 コンテンツの開発 (ITS 画像処理, 映像メディア, 視覚及び一般)」『映像情報メディア学会技術報告』35.9巻、13-16、電子情報通信学会.
- 鈴木美加・藤森弘子 (2014) 「Can-do リスト開発プロセスにおける学習者の自己評価とその分析」『東京外国語 大学留学生日本語教育センター論集』Vol. 40, pp. 53-68.
- 滝川国芳・永井祐也・平賀健太郎・大江啓賢・太田容次・小畑文也・河合洋子・五島脩・副

- 島賢和・高野陽介・武田鉄郎・舛本大輔・三好祐也・森山貴史 (2021) 「病弱教育を行う特別支援学校における遠隔授業実施に関するニーズ調査」『育療』第 68 巻、16-29.
- 高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔 (2021) 「日本の大学・大学院における通訳科目の遠隔授業に関する調査報告」『通訳翻訳研究』(21)、141-162.
- 谷口美穂 (2011) 「日本語学習者の視聴覚メディア使用」『日本語教育方法研究会誌』18 (1)、16-17.
- 谷口美穂 (2012) 「映像作品を用いた日本語教育 —教師へのインタビューから見えた授業の実態と課題—」『桜美林言語教育論叢』(8)、桜美林大学大学院言語教育研究所、143-158.
- 谷口美穂 (2012) 「日本語学習者の視聴覚メディア使用：インタビューからみえた教室外における自律学習の実態」『言語教育研究 = Language education』(2)、65-74.
- 谷口美穂・ローズ・平田昌子・岩下智彦 (2014) 「映像を用いた実践における語彙学習プロセス：関与負荷仮説の枠組みによる教室内インターアクションの分析」『言語教育研究 = Language education』(4)、1-8.
- 谷口南 (2009) 「動画への『テロップ付与活動』を取り入れた授業実践 —中上級日本語学習者を対象とした活動の分析—」『日本語教育方法研究会誌』、Vol.25 No. 2、80-81.
- 趙 恩英・長谷川守寿 (2010) 「TA 参加型日本語会話クラスにおける Moodle を用いた授業連絡について」『日本語教育方法研究会誌』第 17 巻 1 号、48-49.
- 趙 秀敏・今野 文子・朱 嘉琪・稲垣 忠・大河 雄一・三石 大 (2012) 「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングの開発と実践」『教育システム情報学会誌』第 29 巻 1 号、49-62.
- 長谷川旭・平林 泰・本多一彦・杉江晶子・山住富也 (2021) 「新型コロナ禍における名古屋文理大学の ICT 利活用について」『名古屋文理大学紀要』第 21 巻、31-35.
- 中村 香恵子・竹澤 聡・長松 昌男・高島 昭彦 (2013) 「大人数クラス英語授業に効果的な eラーニングを活用したアウトプット活動」『工学教育』61 巻 6 号、89-92.
- 野呂博子 (2013) 「インターカルチュラル教育としての日本語教育における映像メディアの役割」『異文化間教育と映像メディア』、第 38 号、60-72.
- 平澤洋一 (1990) 「映像表現と CAI システム」『解釈』36 巻 12 号、pp. 44-49、解釈学会
- 平澤洋一 (1990) 「留学生を対象とした CAI 日本語教育」『情報処理学会 研究報告』90-CE-11
- 平澤洋一・渋井二三男 (1990) 「留学生のための CAI」『マイコンサーキュラ』15 巻 12 号、
- 日本私学振興財団助成研究成果報告
- 平澤洋一 (2001) 「言語学的なマルチメディア教材へ」『マルチメディア教育支援システムの 研究』 pp. 114-125、165-171
- 前田由樹 (2008) 「中・上級日本語学習者の聴解力を予測する要因—語彙力、文法力、問題解決能力、作動記憶容量の視点から—」『広島大学大学院教育学 研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』57、237-244.
- 松村朋美 (2019) 「視聴覚メディアを用いた上級クラスの取り組み：多様性と自己表現に注目した活動」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』29、 pp. 1-20.
- 松野良一 (2013) 「ドキュメンタリー『As Human Beings』(日本・イスラエル・パレスチナ合同学生会議の記録) を使った異文化間教育の試み」『異文化教育』、38 巻、86-99.
- 三國喜保子・谷口美穂・岩下智彦・川崎タルつぶら・張世襲・岩本尚希 (2011) 「日本語学習者の教室外におけるメディア使用の実態 — 6 カ国におけるアンケート調査から—」

『桜美林言語教育論叢』(7)、147-162.

楊 煜雯(2016)「台湾人日本語既習者の発音能力を維持する e-learning 教材の作成と実践」
『日本語教育』第 164 号、110-125.

ローズ・平田昌子・岩下智彦・谷口美穂 (2014)『桜美林言語教育論叢』桜美林大学大学院
言語教育研究所、第 10 巻、119-137.

Oxford, R. L. (1990) *Language Learning Strategies: What Teachers Should Know*. New
York: Newbury House. (宍戸通康・伴紀子 (1994)『言語学習ストラテジー』凡人社)

引用 URL:

国際交流基金 (2018)『2018 年度海外日本語教育機関調査結果 (速報値)』文化庁
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>

東京外国語大学 留学生日本語教育センター (2020)『Can-do が拓く新たな日本語教育
JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト』
aj_cando_list_excerpt.pdf (tufs.ac.jp)